

当院における COVID-19 流行前後の呼吸器感染症起炎菌検出状況の推移

◎宮澤 翔吾¹⁾、河内 誠¹⁾、飯村 将樹¹⁾、延廣 奈々子¹⁾、沖林 薫¹⁾、水谷 里佳¹⁾、及川 加奈¹⁾、
左右田 昌彦¹⁾
JA 愛知厚生連 江南厚生病院¹⁾

【はじめに】

新型コロナウイルス感染症（以下、COVID-19）が発生して約3年が経過した。COVID-19は2019年12月に中国武漢で確認され、短期間で世界中に拡大した。日本においても2020年1月16日に1例目が発生、2月はダイヤモンドプリンセス号における集団感染が確認され、その後も社会生活に大きな影響を与えた。COVID-19の主な感染経路はエアロゾル感染、飛沫感染、接触感染であり、感染対策としてサージカルマスクや消毒薬などの需要が高まった。今回我々はCOVID-19流行前後における呼吸器感染症起炎菌の推移を調査したので報告する。

【対象】

2017年1月から2019年12月の3年間を流行前、2020年1月から2022年12月の3年間を流行後とし、検出を行った。喀痰、咽頭粘液などの呼吸器検体を対象とし、培養提出件数ならびに呼吸器感染症起炎菌の検出状況を調査した。なお、集計において90日以内の同一患者は除外した。

【結果】

培養提出件数は、流行前は22,461件、流行後は13,705件であり、約60%に減少した。培養提出検体のうち起炎菌が同定できたのは、流行前においては2017年に1,276件、2018年に1,387件、2019年に1,457件の合計4,120件（18.3%）、流行後においては2020年に555件、2021年404件、2022年482件の合計1,441件（10.5%）であった。流行後は起炎菌同定数ならびに同定割合のいずれも大幅に減少した。

起炎菌は流行前においては *Haemophilus influenzae* が2017年に495件、2018年に524件、2019年に569件の合計1,588件（38.5%）、*Streptococcus pneumoniae* では2017年に228件、2018年に223件、2019年に222件の合計673件（16.3%）、*Streptococcus pyogenes* は2017年204件、2018年250件、2019年190件の合計644件（15.6%）、流行後においては *Haemophilus influenzae* が2020年に159件、2021年に122件、2022年に121件の合計402件（27.9%）、*Streptococcus pneumoniae* では2020年に63件、2021年に94件、2022年に95件の合計252件（17.5%）、*Streptococcus pyogenes* は2020年100件、2021年35件、2022年14件の合計149件（10.3%）であり、流行前後ともに *Haemophilus influenzae* がもっとも多く、次いで *Streptococcus pneumoniae* であった。一方、*Streptococcus pyogenes* の占める割合は流行後には減少した。また、一般細菌培養で検出困難な百日咳菌、マイコプラズマの占める割合は大幅に減少した。

【考察】

サージカルマスクの着用、手指衛生の徹底、三密の回避などの感染対策が、COVID-19以外の呼吸器感染症の予防にも有効であったことから、そのまま減少につながったと考える。2023年5月に、COVID-19は5類感染症に引き下げられ、マスクの着用は個人の判断となった。感染対策の緩みにより、今後は呼吸器感染症の増加が予想されるため、動向に注視する必要がある。

【結語】

COVID-19流行後、呼吸器感染症起炎菌同定数ならびに同定割合は大幅に減少した。

連絡先：0587-51-3333（内線2329）